

1 この一週間

三月六日から、五週間あまり、私どもは受難節として過ごしてまいりました。来週イースターを迎えます。今日は受難週の礼拝です。この日は昔から棕櫚(しゅろ)の日曜日ともいわれ、今日与えられているイエスのエルサレム入城の記事が読まれ、説き明かされるのが通例です。

受難週です。この一週間のことを、福音書をもとに、内容の似ているマタイ、マルコ、ルカをもとに、あらましを申し上げると、こうなります。

季節は春です。徐酔祭とも過越祭とも呼ばれる一週間つづく祭りがありました。この祭りは、いうまでもなく父祖たちがモーセに率いられてエジプトを脱出した故事に由来します。ユダヤ最大の祭り、巡礼者の数は一〇万人ぐらいと推計している学者がいます(エレミヤス)。祭りの第一日目は、家族や友人達がそろって過越の食事をするのがならわしでした。

イエスも弟子たちと一緒に祭りのためガリラヤからエルサレムにやってきました。ただこのたびはイエスにとつてたんなる巡礼ではありませんでした。戻る旅ではありませんでした。十字架の死をみすえ、決然とエルサレムに上っていったことがどの福音書にも伝えられています(マルコ一〇・三二他)。

エルサレムでイエスは、夜は、エルサレム市内を出て近くのベタニアという村で過ごし、朝早くエルサレムに来て、神殿境内で人びとに神の福音を説き、教えつづけられます。論争、あるいは問答など、これまで以上に激しかったことが聖書から明らかです。

ガリラヤでのイエスの宣教のはじめから敵対していた人たちが、当時宗教がらみで民衆を支配していた祭司やファリサイ派の律法学者たち、長老達ですが、エルサレムでのイエスに神経をとがらせます。そしてついに、計略を使ってでもイエスをとらえよう、殺そうと考えはじめます。それに協力することになったのがイエスの弟子イスカリオテのユダであり、その裏切りでした。

過越の食事、そしてゲッセマネの園での祈りの後、イエスはとらえられ、ユダヤの裁判かけられます。それが木曜日の夜です。裁判は最高法院というところでおこなわれます。仕切り役は大祭司です。現役の大祭司(カイアフア)のところでは裁判を受けただけでなく、ヨハネによる福音書ではイエスは最初に前任の大祭司(アンナス)のところ連れていかれ、その後カイアフアのところに戻されています。

イエスを死刑に処すべきだと決めたこのユダヤの最高法院はイエスをさらにローマ総督ピラトに訴えます。金曜日の朝、夜が明けてすぐです。ユダヤには死刑執行が許されておらず、イエスを亡き者とするためローマへの反逆罪で訴え出たのです。この男は「ユダヤ人の王」と称した、ローマへの反逆を企てたと。裁判のプロセスは詳しくは申し上げませんが、イエスは死刑の判決を受けます。十字架につけられるため外に引き出され、彼は自ら十字架を背負わされ、およそ一キロの道をゴルゴタと呼ばれ

た丘にまで上っていきます。午前九時に十字架につけられ、午後三時に息を引き取ります。遠くからであれ、見ていたのはガリラヤからイエスに従ってきた一群れの女性たちでした。その中に、マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリア、サロメがいたと、マルコには書いてあります。弟子たちはここにはいません。あえていえば男性の弟子たち、一人はみな、イエスがとらえられたとき逃げ去り、どこかに身を隠してしまったのです。その中のペトロだけが、イエスの裁判の様子をうかがおうと戻ってきますが、その彼もイエスを否んではまいます。

夕方、アリマタヤのヨセフという、彼はイエスの裁判をした最高法院の議員でもあった人ですが、ピラトのもとにイエスの遺体の引き取り方を願い出て、許され、彼はイエスを十字架から降ろしていねいに死体の処理をほどこし亜麻布を巻き、自分のためにつくっておいた、だれも入ったことのない墓穴に安置し、入り口を大きな石でふさぎます。立ち会ったのはあのマグダラのマリア、ヨセの母マリアであったと書いてあります。金曜日の夕方、安息日に入る少し前のことでした。これが簡単に申し上げます、福音書の示す、イエスを巡る一週間です。

2 歓呼する群衆

受難の一週間はイエスがエルサレムに来られる、この町に入られるところから始まります。

この場面は四つの福音書全部に描かれています。マタイ、マルコ、ルカでは、イエスはエルサレムに初めてきたことになっているのに対し、ヨハネによる福音書では三回目です。しかしこの度は、すでに申し上げたように、前の二回とは違うことをイエス自身よく知っていました。

その翌日、祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来られると聞き、なつめやしの枝を持って迎えに出た。そして叫び続けた。「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように、イスラエルの王に」(一一一〜一二三節)。

「なつめやしの枝」は口語訳では「しゅろの枝」でした。新しい聖書翻訳は現在の訳と同じ「なつめやしの枝」になっています。

イエスを熱狂的に歓迎した「大勢の群衆」とは、もちろんユダヤ人の大群衆です(一二・九)。

われらの主がこうして歓迎されたことは喜ばしいことですが、少し違和感がないではありません。というのもこの、たぶん同じ「群衆」が、四、五日後には、イエスを十字架につけると叫び続けることになるからです。

ローマ総督ピラトによる裁判のときです。ピラトはローマという国を代表して法を守り、かつ守らせなければならぬ立場の人で、そのために彼には権力を与えられているのです。ピラトは、ローマに反逆したとして訴えられたイエスにその罪はないと判断していました。そうであるなら権威をもって示せばよかったのに、自分の統治下

にあるユダヤの民衆を恐れて、自分の下すべき判断を回避し、それを集まっていた群衆に委ねてしまいます（マルコ一五・六以下）。群衆は祭司長らに扇動されて、祭りの恩赦を人殺しバラバに与えるように、ナザレのイエスは十字架につけるよう要求します。ピラトは群衆を満足させようと思つて、バラバを釈放し、イエスを十字架につけるのです。一方でイエスがエルサレムに来たときに歓迎した群衆、他方でピラトの前で十字架につけると叫びつづけた群衆。同じ群衆です。イエスのエルサレム入城の歓迎とは何だったのでしょうか。それを明らかにするのが一七節以下です。

イエスがラザロを墓から呼び出して、死者の中からよみがえらせたとき一緒にいた群衆は、その証しをしていた。群衆がイエスを出迎えたのも、イエスがこのよくなしるしをなさつたと聞いていたからである（一七〜一八節）。

ここに群衆がイエスを大歓迎して出迎えた理由が書いてあります。群衆はイエスにしるしを求めた、奇跡を期待したのです。イエスをメシアとして、キリストとして歓迎したのではないのです。

ヨハネによる福音書では、この前の章にラザロの死とその復活のことが詳しく出ています。そして今日の箇所の前にも、それと関連して、ラザロがイエスによつて甦らされたことを聞きつけて、イエスだけでなくラザロも見ようとしてユダヤ人大群衆が来たということが書いてあります（一二・九〜一一）。

これらを考え合わせればイエスを熱狂的に歓迎したのは、特別に奇跡を行う人としてのイエスへの好奇心であつて、その元には、そうした力をもつ彼にローマの支配を終わらせる解放者、新たな支配者、「イスラエルの王」（一三節）を期待する、そういう思いがあつたことが分かります。

じつは「なつめやしの枝」（棕櫚の枝）を振つたことにも新たな支配者の、政治的な支配者の登場を願い、歓迎する行為がかくされているといわれています。なつめやしの枝を振るといふ行為はイスラエルの歴史の中で何回か出てきます。知られているのは紀元前二世紀、ユダまたの名をマカバイという指導者が、異教徒の手におちていたエルサレムの町と神殿をとりもどし、清めたとき、民衆は歓呼し、手になつめやしの枝をかざして賛美したと伝えられています（□マカバイ一〇章）。これは一例にすぎませんが、なつめやしの枝を振るといふパフォーマンスは民族の解放者を歓迎し期待する願いがこめられていたのです。

ですから彼ら群衆がピラトの前で、イエスを十字架につけ、人殺しバラバは釈放せよと叫んだのも、扇動されてであるとはいえ、ローマに反逆し、暴動を企て、人を殺したバラバに内心で共感していたのかも知れません。イエスとは果たしてそのような彼らの期待する「イスラエルの王」だったのでしょうか（六・一五参照）。

3 群衆

こうした大群衆の熱気に比べれば、エルサレムに来てイエスのしたことは、王には

似つかわしくない行為であり、何と目立たない、ある意味で期待を裏切る行為であったことでしょうか。

イエスはろばの子を見つけて、お乗りになった。次のように書いてある通りである。「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、お前の王がおいでになる、ろばの子に乗って」(一四〜一五節)。

イエスのしたことは、とくにこのヨハネの福音書ではわずかで、ろばの子を見つけて乗ったことだけでした。

しかもそれがどういう意味だったのか、その時は自分たちも分からなかったと、わざわざ説明の言葉がついています。後から分かった、「イエスが栄光を受けられたとき」(一六節)はじめて分かったと。

「栄光を受けられたとき」というのは、甦り、父なる神のもとに上っていかれてから、聖霊が下され、それによってイエスがメシア(キリスト)であることがはっきり示され、信じ、告白し、宣教するようになってからだったということです。この方はたんにイスラエル民族だけの王ではなくこの世のまことの王であることが、そのとき分かったというのです。

王であるお方がろばに乗って、しかもろばの子に乗って来られる、まことに奇妙な行進であったに違いありません。弟子たちは旧約のゼカリヤの預言の言葉(九章)によってその意味を理解したのです。

一般にこの世の王にとってふさわしいのは「ろば」ではなく馬です。軍馬です。車をつなげば戦車になる馬です。馬は戦いを意味し、破壊を意味し、支配を意味します。しかし考えてもみてください。戦いというのは勝つ側と負ける側を生み出します。支配する支配される関係を生み出します。たとえ支配されているユダヤが、支配している強大なローマに勝利しても、支配、被支配が逆になるだけで、支配関係そのものはなくならないのです。とすれば、どうしてそこに平和が到来するでしょうか。支配そのものがなくならなければならないのです。

だれか王のもので平和が来るすれば、支配・被支配ではなく、互いに仕え合う関係がそこに生起しなければならぬ。愛の関係といってもよいでしょう。そうした関係は、いつも、相手に期待するものではなく、こちらが作り出す関係です。イエスはこの関係を作り出すために人となり、低くなり、僕となって私どもとともにいまし、私どもの重荷を自分のものとして背負った方です。最後には自分の命を与えるまでに人を愛した神です。まことの王は僕となる王です。この王のご支配のもとで、人が生かされます。互いに生かれます。この方が治めるところ、そこが神の国です。このまことの王を、私どもも、私どもの王として、主として迎え入れたいのです。

(二〇一九年四月一四日)